モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史(4)

――ヘレラウの誕生――

副　島　美由紀

1．〝ヘレラウの子供たち〟

アメリカの作家アプトン・シンクレアのピュリッツァー賞受賞作品に，ナチス支配下のドイツを扱ったシリーズ『世界の終わり』と『竜の歯』[1]がある。主人公のアメリカ人青年は少年時代の一時期をドレスデン郊外のヘレラウで過ごし，地元の子供たちと共に学び，年に一度開催される祝祭週間を体験する。その時上演されたグルックのオペラ「オルフェウス」を見て彼が感銘を受ける場面を，シンクレアは次のように締めくくっている。「いずれ必ずヘレラウの子供たちの中から未来のオルフェウスが現れ，人々の感覚を魅了し，精神を鼓舞し，貪欲や憎悪の嵐を鎮めるだろう。そして戦争は避けられるだろう。国家間の戦争のみならず，ヨーロッパを引き裂こうとしている苛烈な階級闘争までも。ダルクローズ学校の富裕階級の生徒たちは，工場地区である郊外の労働者たちの子弟と肩を並べて一緒に踊っているではないか。ミューズの神殿の中には階級も国民も人種もない。あるのはただ，美と歓喜の夢を抱いた人間性のみである。それが1913年，芸術を愛する者皆の信念だった。それがこの明るい牧場の上に建つ高くて白い神殿で教えられていた信条だった。この幸運な現代（モダン）の日々に，文明の発展は必然となり，不可避となった。」[2]

---

[1] Sinclair, Upton, World's end, New York, 1940; Dragon's teeth, New York, 1942.

[2] Sinclair, Upton, World's end, p.5.

〝ヘレラウの子供たち〞とは，1909年に建設されたドイツ最初の田園都市に育つ子供たちのことである。ヘレラウは労働者に良質の住宅を提供すると同時に自立した自主管理的共同体を作り，さらに芸術教育によって〝新しい人間〞を育てるという希望のもとに建設された。また芸術家や作家たちが住み集うことによって生まれたヘレラウの芸術家コロニーは，新たな文化の発信地となることを目指して意欲的に活動していた。ヘレラウの子供たちは，ダルクローズ学校でリトミック教育を受け，ドイツ工芸工房で工作を学び，皆が庭付き住宅に住むという恵まれた住環境で育つ子供たちであった。シンクレアは実際1913年の祝祭週間にヘレラウを訪れて芸術家コロニーに住む作家たちと交流を持っている。経済・社会改革運動の指導者でもあった彼がこの生まれたばかりの田園都市に満ちていた期待や高揚感を人々と共有したであろうことは，上記の筆致からも容易に想像することができる。ヘレラウに集った人々は，「新たな人生哲学と改革志向の時代，総合的な人間性探求と計画的な芸術教育の時代」[3]の到来を感じていた。

田園都市運動は，産業革命の過程において悪化した都市の住環境を改善し，疲弊した人々の人間性を回復し，健康で快適かつ公正な社会生活を構築しようとする総合的な社会改革だった。それはまた工業を否定することなく農業や自然と併存させ，かつ芸術活動を奨励することによって人間的な生産社会を創ることを目指した，言うなればモダニズム時代のユートピア像の一つの顕現であった。

ヘレラウの建設はドイツにおける田園都市建設運動の最初の実例として記録されるのみならず，住宅改革，土地改革，芸術教育運動，自然療法運動等の生活改革運動が最も総合的に結びついた例として記憶されるべき出来事である。また二度の大戦とナチズムの台頭，東西ドイツの分断という歴史の奔流に翻弄されて理想の実現が阻まれたことの悲劇性においても，ヘレラウの

---

[3] Ring, Reinhard, Das verklärte, das reale und das beispielhafte Hellerau, in: Ring, Reinhard (Hrsg.), Hellerau Symposion, Remscheid, 1993, S.119.

名は記憶されるべきかもしれない。本論は田園都市というモダニズムにおけるユートピア像の発想と実現に至るまでの歴史を回想する作業の一環として，ドイツで最も有名な田園都市の歴史をこれまで3編の論文[4]において考察してきた前史を踏まえながら個別的に記述する試みである。

2．ドイツ田園都市協会の成立

田園都市建設構想は，1870年代に始まった住宅改革運動が労働者用住宅の改善や住宅建設組合運動，土地改革運動や労働者コロニー建設等々の成果を経て徐々に発展した思想である。もともとイギリスのエベネザー・ハワードによって1898年に提唱されたものだが[5]，1900年にドイツにもたらされ，1902年には「ドイツ田園都市協会 Deutsche Gartenstadt Gesellschaft（以後DGGと略記）」が誕生している。DGGの母体は入植運動コミューンの一種である「新共同体　Neue Gemeinschaft」で，それは「フリードリヒスハーゲン文学サークル」を形成していたハルト兄弟（Heinrich und Julius Hart）やE・ミューザムらの文芸批評家および作家たちと政治活動家のカンプフマイアー兄弟（Paul und Bernhard Kampffmeyer），アナルコ・ソーシャリストのG・ランダウアーや汎神論的エコロジスト達を中心として形成された。「新共同体」はシャルル・フーリエによる19世紀初頭における空想上の共同体「ファランステール」に理想像を求めると同時に禁酒・菜食主義，自然療法主義，ヌーディズムといった19世紀末特有の生活改革要素を持ち併せてお

---

[4] 副島美由紀「モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史(1)――世紀転換期の生活改革運動」，小樽商科大学「人文研究」第96輯，1998；「モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史(2)――労働者コロニーの建設」小樽商科大学「人文研究」第97輯，1999；「モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史(3)――E・ハワードに先んじたドイツの田園都市構想」小樽商科大学「人文研究」第100輯，2000.

[5] Howard, Ebenezer, Tomorrow: a peaceful path to real reform. London, 1898. (reprint, edited by Richard Le Gates and Frederic Stout) London 1998.（1902年にGarden Cities of To-Morrowとして再版される。）『明日の田園都市』長素連訳，鹿島出版会，1968.

り，またアンリ・ファン・デ・ヴェルデによる指導を仰ぐなどして芸術教育にも関心を持っていた。よってその改革志向には田園都市構想と共通するものがあったが，自然回帰的新ロマン主義や民族主義的要素による擬似宗教的プログラムが災いして結成からほどなくして解体し，ベルリンの商人ハインリヒ・クレープスによってハワードの田園都市思想を知ったハルト兄弟とB・カンプフマイアーが，入植運動の理想を託すかたちでDGGを設立することになる[6]。

田園都市構想においてDGGのメンバーを最も強く引きつけたのは，その土地公有化理論であった。DGGの初代会長，H・ハルトはそのプログラムに，「DGGの目標は，都市および農村の公有地を基盤にした田園都市の建設理念およびその目的に有益なあらゆる対策の促進に対する理解を広めることである。DGGが奨励するのは，農地の経済的に調和のとれた分配とその都市部との共存を貫徹するような入植地の開墾である。DGGが目指すものは，産業の農村部への組織的な移転による住環境改革であり，そこでは産業の要請も十分に考慮した衛生的で美的な広範囲の建設が可能となるはずである。(...) 現在のあらゆる生活改善思想が，田園都市において最も確実かつ有益に結実する。」[7]と記している。また1904年フランクフルトで開催された最初の「ドイツ住宅会議」においても，DGGは住宅・定住問題に関して土地改革の必要性を強調したテーゼを発表し，「住宅改革は都市人口の分散と計画性のある宅地開発を伴って初めて可能となるのであり，そのためには土地の公有化が不可欠である」と説いている[8]。勿論，〝感動的ではあるが国民経済的には甘い考え〟といった批判もあったが[9]，土地と住居の自主管理権が保証された自治体

---

[6] Schollmeier, Axel, Gartenstädte in Deutschland. Münster,1988, S. 58; Linse, Ulrich, Ökopax und Anarchie, München, 1986, S.35, 65f; Hartmann, Kristiana, Deutsche Gartenstadtbewegung, München, 1976, S.27.
[7] Schollmeier, ibid., S.57.
[8] ibid., S.60.
[9] ibid., S.63.

の形成や，換気や採光に配慮した庭のある住宅といった住居改善方法，また共同体用のコンサートホールや図書館の建設といった文化的プログラムには実行可能性があった。田園都市思想は生活改革運動思想の最も進化した器としてドイツ社会に徐々に浸透していき，第一次大戦前にはケーニヒスベルク，ベルリン，ハンブルク，マグデブルク，ルードヴィヒスハーフェン，マンハイム，ニュルンベルク，ミュンヒェン，ヴュルツブルク，シュトゥットガルトその他の都市に「田園都市協会」が誕生してそれぞれが田園都市建設を検討していたと言う[10]。そして最初に田園都市建設に着手したのが，ドレスデンの企業家カール・シュミットであった。

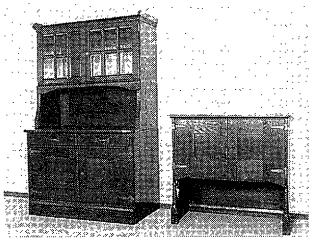
3．カール・シュミットとドレスデン・クラフト工芸工房

カール・シュミット，1909.

イギリス最初の田園都市レッチワースの建設に出資したのはチョコレート会社のキャドバリーと石鹸会社リヴァーの二つの企業であったが，ヘレラウの言わば生みの親となったカール・シュミット（Karl Camillo Schmidt, 1873－1948）もやはり家具工場の所有者であった。シュミットはケムニッツ近郊の織物職人の家庭に生まれ，親族に椅子の製造者がいたこともあって10才の頃から家具職人になることを夢見て育つ。ケムニッツで徒弟時代を過ごした後，ドイツの職人的伝統に則って北ドイツ，デンマーク，スウェーデン，ロンドンへと修行の旅に赴き，起業家精神や機械化された生産方式を学ぶ。特にロンドン滞在中，キャドバリー社の進歩的な労働者コロニーやアーツ・アンド・クラフツ運動に影響を受け，また産業革命の社会的問題点や大量生産の問題点を目の当たりにして，家具工場の将来的責任は効率，芸術性，労働の社会的側面の3点を向

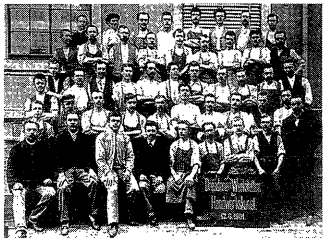
[10] Krabbe, Wolfgang R., Gesellschaftsänderung durch Lebensreform, Göttingen, 1974, S.31.

上させることであり[11]，また製作自体の課題は工業と芸術の融合を図って模倣や装飾美に頼ることなく素材と目的に適った家具を製作することであると考えるようになる[12]。そしてドレスデンに帰ってマイスターとなった後，1898年に協力者を得て家具製作会社「ドレスデン・クラフト工芸工房 Dresdner Werkstätten für Handwerksknust」を興すのである。



「ドレスデン・クラフト工芸工房」による家具，1901.

当時のドレスデンではちょうど工芸に関する関心が高まりつつあり，工芸博物館において装飾や工芸の様々な展覧会が開催されていた。シュミットは建築家や芸術家との共同作業を重視して社員に展覧会やコンペへの参加を奨励し，1900年の住宅展示会コンペではクラフト工芸工房が賞を取ることになる。課題はドイツ風で質素な市民用住宅のデザインで，居間・寝室・台所の内装全体を750マルクで仕上げることが条件だった。1890年代は低所得者用住宅の建設が建築家の課題として認識され始めた時代であり，ベルリンでも初めての「労働者住宅設計図展示会」が1892年に開かれている。また「芸術の番人 Kunstwart」「装飾芸術 Dekorative Kunst」「ドイツの芸術と装飾 Deutsche Kunst und Dekoration」といった雑誌が外国の模倣に依らない芸術を奨励し，装飾がユーゲントシュティールを志向す



「ドレスデン・クラフト工芸工房」の従業員，1906.

[11] Fasshauer, Michael, Das Phänomen Hellerau, 1997, Dresden. S.15.
[12] Peschel, Peter, Karl Schmidt und seine Werkstätten für Handwerkskunst, in: Dresdner Hefte, Jrg. 15, Heft 51, Dresden, 1997, S.4.

る一方で建築は機能的で質実な美を求めていた。シュミットの存在と彼の工房は業界でその名を知られるようになり，同様の理想を抱く文筆家や建築家たちとの交流が始まる。中でも彼の最も重要な協力者となったのが，ミュンヒェン出身の画家兼建築家で1900年当時ユーゲントシュティールの限界を見極めニュルンベルクで低所得者用住宅のデザインを手がけていたリヒャルト・リーマーシュミット（Richard Riemerschmidt, 1868－1957）で，彼は後にヘレラウの主要なデザインを手がけることになる。さらに7年間の英国滞在経験を生かして一戸建て建築に関する著書を著していたヘルマン・ムテーズィウス（Herman Muthesius, 1861－1927）やトリーアの専門学校で建築を教え，やはり小規模住宅に最大の関心を抱いていたハインリヒ・テッセノウ（Heinrich Tessenow, 1876－1950）がそれに続くことになる。また思想面における重要な支援者となったのは後にヴァイマール憲法の起草者となる政治家のフリードリヒ・ナウマン（Friedrich Naumann, 1860－1919）である。ナウマンは1896年，〝土地改革の父〟と呼ばれた社会改革者のアドルフ・ダマシュケ等と共に国民社会協会（der Nationalsoziale Verein）を結成しており，特にキリスト教精神に基づいた社会改革のプロパガンディストとして活動していた。芸術教育運動にも関わると同時にDGGの会員でもあり，1904年からは帝国議会議員となっている。

そのような芸術関係者の集まりから，1907年に「ドイツ工作連盟Deutscher Werkbund」が設立される。それは近代化による芸術と産業の融合を目指す12名の芸術家と12の企業から成る同盟で，上記の3名をはじめペーター・ベーレンスやテオドール・フィッシャー，ファン・デ・ヴェルデといった気鋭の建築家が名を連ねていた。芸術と産業を結合させた成功例としてその名を知られていた「ドレスデン・クラフト工芸工房」に「ドイツ工作連盟」の事務所が置かれ，シュミットの工場は進歩的な建築家・工芸家たちに連携の機会を提供する場となる。芸術教育にも関心のあったシュミットが企業の教育実践としてまず着手したのが工場内の職人養成であったが，従来の徒弟制度のもとでは真に個人的な創造性の涵養は困難であることを実感するよう

になり[13]，代わってより大規模な事業計画が誕生することになる。

4．ヘレラウの始まり

ドレスデン・クラフト工芸工房は成長して1906年には250名の従業員を数えるようになり，しかも翌年「ミュンヒェン家具工房 Münchner Werkstätten für Wohnungseinrichtung」と合併して「ドイツ・クラフト工芸工房 Deutsche Werkstätten für Handwerkskunst GmbH」となる。工場新築の必要性に迫られたシュミットがドイツ工作連盟の仲間に相談したところ，皆が揃って提案したのが田園都市の建設であった。シュミットがそれからドレスデン郊外に適切な土地を見つけて73人の地権者と買い付け交渉に入るまで，さほど時間はかからなかった。2つの村落を統合した新たな地所は，シュミットによって〝ヘレラウ〟と名付けられる。彼は以下の3点を田園都市建設における自分の責務と考えていた。工場を建設して安定した労働の場を提供すること，良質の住宅を労働者に提供すること，そして田園都市構想に賛同する工場労働者以外の多様な住民を勧誘し，文化的・社会的に自立した共同体を作り上げることである。シュミットがまず計画したのは「ドイツ・クラフト工芸工房」の工場と社屋，社員の住宅として100戸の家族用住居，独身者用の寮，市民層を対象とした中規模住宅の建設で，後の計画として商店や医院の誘致と幼稚園やサナトリウムの建設が予定されていた。

住民を募って理想的な共同体を創るためには田園都市構想に対する周囲の理解と賛同が不可欠であったが，ちょうどその年ハワードの著書が翻訳されてドイツ語で読めるようになり[14]，シュミットの周りの多くの人々が彼の田園都市建設計画に関心を示すようになる。彼らの討論はウィーンの建築家オット・ヴァーグナーの伝記を著した芸術史家のJ・A・ルクス（Joseph August Lux）によってまとめられ，「これは空想上の話でも理想論でもなく，

---

[13] Fasshauer, ibid., S.53.
[14] Howard, Ebenezer, Stadt in Sicht, Jena, 1907.

冷静で現実的な考察である。」というコメントと共に本として出版されるほどであった[15]。

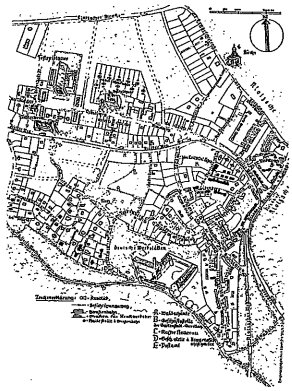
シュミットの計画実現にあたり，最も強力な推進役となったのが「ドイツ工作連盟」の秘書役を勤めていたヴォルフ・ドールン（Wolf Dohrn, 1878－1914）である。ドールンはナポリの水族館を設立した海洋学者のアントン・ドールンを父に，歴史書の翻訳を行う白ロシア人女性を母に持ち，ナポリの学際的環境のもとに育ったコスモポリタンであった。彼の再従兄弟にはヴィルヘルム・フルトヴェングラーがいる。ドイツで文学・美学・哲学・経済学を修めたドールンは，フリードリヒ・ナウマンに師事して政治家になることを考えていたが，ナウマンの紹介でシュミットのもとに赴き，彼の事業の事務的な側面を支えていた。シュミット，リーマーシュミット，ドールンの三者はそれぞれヘレラウの建設においてちょうど出資者，主任デザイナー，オーガナイザーの役割を果たしていたが，中でも田園都市構想の社会改革的側面，特に土地改革思想に最も強く魅せられ，新たな共同体創造に向かってユートピスト的楽観主義で邁進していったのが理想主義者のドールンであった。彼は田園都市準備委員会を指揮して資金提供者を集めるなど，田園都市の運営面において重要な牽引的役割を果たす一方，ヘレラウ建設計画をまとめてその名も『田園都市ヘレラウ』という著書を残す[16]。そして1908年，140 haの土地購入手続きが完了し，土地の法的な所有者としてシュミット，リーマーシュミット，ドールンの三名によって「田園都市ヘレラウ株式会社 Gartenstadt Hellerau GmbH」が設立され，同時にシュミットとザクセン州との交渉によって路面電車の路線をドレスデンからヘレラウまで延長する案が州議会で可決される。そして翌年の4月1日にドイツ最初の田園都市建設が始まることになる。

ヘレラウの土地は工場地域，小住宅地域，邸宅地域，公共用地，保留地の

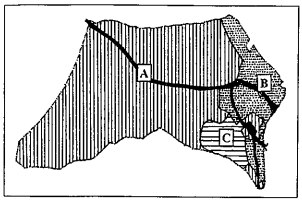
---

[15] Fasshauer, ibid., S.65.
[16] Dohrn, Wolf, Gartenstadt Hellerau, Leipzig, 1907.

5つのゾーンに分けられ，「ドイツ・クラフト工芸工房」が所有する工場地域以外はすべてが共同体の所有とされた。さらに低所得者のための小住宅を建設・運営する団体として「ヘレラウ建設組合 Baugenossenschaft Hellerau GmbH」が組織され，「ドイツ・クラフト工芸工房」，「田園都市ヘレラウ株式会社」，「ヘレラウ建設組合」の3つの組織が共同でヘレラウの土地を所有・管理することになる。さらにこれらの組織の上にシュミット，ドールン，リーマーシュミットにムテージウス，テオドール・フィッシャー等の建築家を加えた9名からなる「建築・芸術鑑査委員会（Bau- und Kunstkommission）」が置かれ，個々の建物が全体の審美的基準と目的に合致しているかを鑑査する役割を果たした。

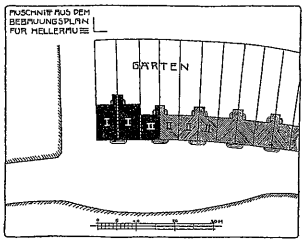


ヘレラウの全体図



3つの組織による土地の分割
A－「田園都市ヘレラウ株式会社」
B－「ヘレラウ建設組合」
C－「ドイツ・クラフト工芸工房」

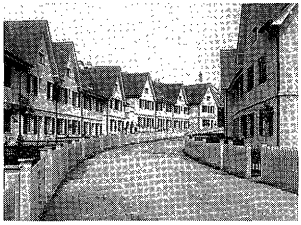
ヘレラウの建設における最も困難かつ重要な課題は低所得者用の住宅群だった。リーマーシュミットは，クラフト工芸工房の従業員に対するアンケート調査や労働者コロニーの視察を行いながら，2～6人の子供があり年収1000～2000マルクの家族用に，建築面積250平米以下で年間家賃が300マルク以下の小規模住宅を建てることになる。しかも住環境改善策として各戸は最低でも共用の浴室・洗濯室と3部屋以上を備え，独立した玄関と100～200平米の庭があること等々の条件があった。結果として51平米の最小のものを初



小住宅群のデザイン，白い区画が庭

め 34 種の小住宅 200 戸が誕生し，それらは「ドイツで最も建設費の安い住宅」と言われた[17]。

それに対し，「田園都市ヘレラウ株式会社」に属する〝邸宅地区〟に関しては，居住希望者がヘレラウの提示する土地と住宅タイプの中から気に入ったものを選び，借地権と建設費の一部をローンで支払いながら住むという方法が採られた。邸宅と言っても一戸建てという意味で，その規模はむしろ質素なものであったが，住宅部分は敷地全体の 1/5 であることという条件を守れば基本的には個人の注文住宅であるという美点があった[18]。



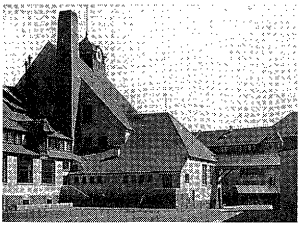
小住宅地区

邸宅の一例

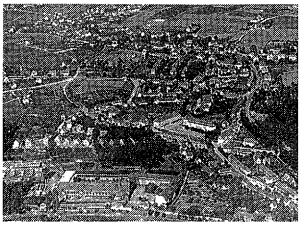
ヘレラウは 1920 年代半ばまでに全体を完成させる予定で建設が開始され，1910 年にまず 60 家族によって共同体経営が始まった。1913 年には 407 世帯分 383 戸の住宅が完成し，400 家族 1900 人が住む規模に成長している[19]。内外からのヘレラウ批判として，まず「ヘレラウ建設組合」に参加するための組合費も加算すると小住宅の家賃は安いとは言えないこと，小住宅地区と邸宅地区の分離が階級差の温存につながること等の指摘があった。また，「ドイツ・クラフト工芸工房」の社屋は，「労働，住居，芸術，自然」

ヘレラウへの勧誘広告

[17] Fasshauer, ibid., S.82.
[18] 地価の上昇に鑑みて田園都市の住民全体の福利にかなう場合，個々の住宅購入が許可された。
[19] Sarfert, ibid., S.25.



「ドイツ・クラフト工芸工房」



ヘレラウ，1933.

の調和という理念のもとにリーマーシュミットによって大農場風の南ドイツ様式で建設され，1912年にヘレラウを訪れたE・ハワードに「ヘレラウ工場ほど美しい工場を我々は持たない」と賞賛されたが，グローピウス等のバウハウス派には「即物性に欠けた農場ロマン主義」と揶揄された[20]。しかしヘレラウ共同体の理念は，「外的刺激によって無防備に突き動かされつつ生活するような寄る辺なき状態と無政府的精神状態を，新種の生活理想像に駆られることなく存在の事実と成長によって克服すること」[21]であるというドールンの言葉からは，ロマン主義というより質実な生活の充実感への願望が感じられる。そして〝存在の事実と成長〟を共同体の中で育む活力として，芸術教育が必要とされていた。

5．ダルクローズ学校とヘレラウの芸術教育

住宅改革と土地改革が芸術教育運動と結びついている点は，ドイツ的田園都市思想の特徴である。労働と生活と芸術の融合は〝人間存在の高次元への発展〟[22]を可能にするという考えは，産業化によってもたらされた文化ペシミズムを芸術教育によって乗り越え，人間性を産業革命以前の健全な状態に〝再生〟しようとする感情生活の刷新欲求に基づいていた。前述の〝新しい人間〟創造への欲求である。同時に芸術は素人の参加によって様式の硬直から免れるという考えがあった。ヘレラウではどのような芸術を中心に据えるべきか

[20] ibid., S.74.
[21] ibid., S.106.
[22] Schollmeier, ibid., S.67.

について，音楽教育の重要性を説いたのはシュミットの仲間の一人でチェコの音楽家，リヒャルト・バトカ（Richard Batka）である。バトカは造形芸術が基本的に個人の創造であるのに対し，音楽教育は個人的感性の涵養であると同時に合唱や合奏，ダンスを通じて社会性を養い協調的な活動を可能にすることを指摘した。そして彼が推薦したのがジュネーヴのコンセルヴァトワールで実践されていた「リトミック教育」である。「リトミック教育」はリズムの体得と表現を中心した音楽教育で，ウィーン生まれのスイス人，エミール・ジャックーダルクローズ（Emile Jaque-Dalcroze, 1865－1950）によって提唱された。またそれは新しい身体性を希求していた当時の時代精神に合致したものだった。

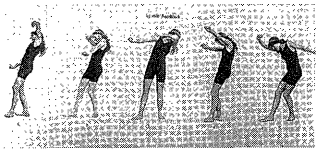
19 世紀末のドイツでは，物質主義や都市における人間性の硬直をもたらした文明編重主義への反発から自然への回帰，特に身体の再発見が求められていた。ワンダーフォーゲル，裸体運動，菜食主義運動，イサドラ・ダンカンに代表されるモダンダンス・ムーヴメントなど，様々な運動が自然と融合する身体を志向していた。身体に内在するリズムが人間生活の要素として〝再発見〟され，人々はそれが生を規定する原理と深く関連していることに気づく。経済学者のカール・ビューヒャー（Karl Bücher）が『労働とリズム』[23]を著し，文学や美学の分野でも聴覚刺激や身体感覚が関心の対象となる[24]。そしてリズム教育を芸術教育の方法として組み入れた最初の一人がダルクローズだった。ダルクローズはウィーンに生まれ，ウィーンとパリで音楽を学んだ後 1892 からジュネーヴのコンセルヴァトワールで音楽史とハーモニー理論を教えていたが，椅子に座って楽譜を読むことから始まる音楽教育に疑問を持つようになる。かつてパリでアマチュア演劇に参加し，1 年間のチュニ

---

[23] Bücher, Karl, Arbeit und Rhythmus, Leipzig, 1899.

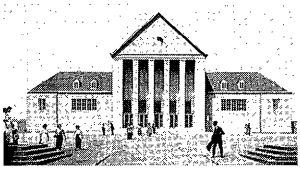
[24] Lorenz, Karl, Der Traum vom “Laboratoire d’une humanité nouvelle, in: Ring, Reinhard (Hrsg.), Hellerau Symposion, Remscheid, 1993.（詩のリズムとメロディーを研究したライプツィヒ大学のエドゥアルト・ズィーヴェルスや生理学・心理学的観点で美学を講じたミュンヒェン大学のテオドール・リップスなど。）

ジア滞在時代に民族音楽や舞踊に触れた彼は，身体中の根源的な律動を生かして様々な感覚細胞を活性化させるという発想を得る。そして全人格的な音楽性の涵養を目指して，リズムや音程やメロディーを身体で再現して連続した運動として表現するための一連のエクササイズを考案する。ダルクローズのリトミック教育はドイツでも注目されるようになり，1906年に講演のためドレスデンに招かれた彼は，そこでドールンと出会うことになる。

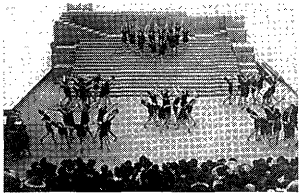


リトミック体操による5拍子の表現

自らジーヴェルスやリップス[25]のもとで文学・美学を学んできたドールンは，ダルクローズ・メソッドに触れてそれが芸術教育の未来を方向付けるものだと確信し，ダルクローズをヘレラウに招聘して校舎の建設に着手する。ダルクローズにとっても自分の学校の設立はリトミック体操を学科の一つから総合的芸術として発展させる可能性を意味しており，また自分の教育メソッドを社会福祉的な教育課題と結合させることは魅力的な課題でもあった。彼は次のように書いている。「ヘレラウでは，土地とその住民を特別に育てることによって有機的な生と調和を創造することが重要なのだ。彼らの家屋とまったく同じように，モラルと美の建築をリズムによって創造することが重要なのだ。私はリズムをひとつの社会制度の地位にまで高め，自然に広



祝祭劇場，正面と寄宿舎を含めた全体像



1912年の祝祭週間におけるリトミックのパフォーマンス

[25] 注25参照。

まってあらゆる住民の心の真の証明となるような新しいスタイルを広めていきたい。(...) 新しい社会の基礎となるべきは，肉体と精神の健康なのである。」[26]

1912年には祝祭劇場を兼ねたダルクローズ学校の教育施設が完成する。自らヘレラウに移住して邸宅のデザインを手がけていたハインリヒ・テッセノウの設計によるもので，とりわけシンクレアが〝明るい牧場の上に建つ高くて白い〟〝ミューズの神殿〟と表現したシンメトリックな新擬古典主義様式の祝祭劇場は，ヘレラウの理想を象徴する記念碑的建築物となる。ジュネーヴからの転校生45名も含めて最初103名だったダルクローズ学校の生徒数はすぐに500名を越すようになり，年に一度開催される祝祭週間は国際的な注目を浴びてバーナード・ショーやマックス・ラインハルト，ディアギレフやニジンスキーといった著名な舞台芸術関係者たちがヘレラウを訪れるようになる。そしてヘレラウの子供たちは，ダルクローズ学校でリトミック体操を学び，放課後はドイツ・クラフト工芸工房や芸術家コロニーのアトリエに通って工芸を学ぶという，恵まれた芸術教育を享受するのである[27]。

6．芸術家コロニー

ドイツ・クラフト工房の工芸家たちがヘレラウに移住し，彼らの周囲に仲間たちが集い住んで芸術家コロニーが出来るのは言わば自然の成り行きであった。ミュンヒェン家具工房の彫金師ゲオルク・フォン・メンデルスゾーン (Georg von Mendelssohn)，彫刻家のパウル・ペータリッヒ (Paul Peterich) を初め，陶芸家やピアニストたちがヘレラウの住環境に惹かれて移り住み，アトリエを建てて芸術活動を始める。さらに文筆家や作家たちがそれに続いた。コロニーの発展においてとりわけ重要な役割を果たしたのは出版業

[26] 松沢慶信編，『ドイツダンスの百年』，東京ドイツ文化センター，1996．p.25.
[27] 1913年には国民学校ができて普通教育も行われるようになるが，ここでもリトミック体操や工芸が教えられていた。

者のヤーコプ・ヘーグナー（Jakob Hegner）であろう。ウィーン生まれの文学青年であったヘーグナーはまずライプツィヒとベルリンで文筆及び出版活動の修行時代を過ごすが，ベルリンで出版業者としての独立に失敗し，友人のメンデルスゾーンが住むヘレラウにやって来る。すると修行時代に知り合った作家たちが彼の周囲に集まるようになり，志と向上心を同じくする20代の青年たちはすぐにヘーグナーが興した「ヘレラウ出版 Hellerau Verlag」を拠点として活発な執筆・出版活動を始めるようになる。ヘーグナーは特にフランシス・ジャム，ポール・クロデール，ジョルジュ・ベルナノス等によるフランス文学を自ら翻訳出版し，またゲオルク・ビューヒナーやホーフマンスタール，マルティン・ブーバー等の著書や，ヘレラウ在住の作家たちによる作品の出版も手がけた。ヘレラウ在住の作家たちはアルフォンス・パケ（Alfons Paquet），エミール・シュトラウス（Emil Strauß），テオドール・ドイブラー（Theodor Däubler），カミル・ホフマン（Camill Hoffmann）等であったが，その中心的存在はプラハ出身のパウル・アードラー（Paul Adler, 1878－1946）であった。アードラーは「ヘレラウ出版」から詩集や小説を出し，ドイブラーと共に文芸雑誌『総数 Summa』を発刊する。寄稿者の中にはE・ブロッホやH・ブロッホ，R・ムジール等がいた[28]。また14カ国語を解したという語学力を生かしてフランス語による原著から2冊の日本文学研究書[29]を翻訳出版するなど，アードラーの活動は極めて多面的であった。アードラーを核としたヘレラウの同業者を訪問する作家たちも多く，ヘーグナーのウィーン時代の友人S・ツヴァイクやG・ハウプトマン，リルケ，後年にはカフカもプラハから訪れており[30]，またH・ヘッセはインドから帰国し

---

[28] Sarfert, ibid., S.52.

[29] Adler, Paul, Japanische Literatur : Geschichte und Auswahl von den Anfängen bis zur neusten Zeit, Frankfurt am Main, 1926. ［Der Inhalt ist zum größten Teil eine Übers. von: Anthologie de la Littérature japonaise des origines au XXe siécle von Michel Revon, Paris, 1910.］ Adler, Paul, Sachwörterbuch zur japanischen Literatur, Frankfurt am Main, 1926.

[30] Sarfert, ibid., S.114f.

た後，落ち着き先としてヘレラウも考慮に入れていたと言われている[31]。恐らくヘレラウはルガーノ湖畔のモンテ・ヴェリタと並んでドイツ語圏における芸術家コロニーとして知られていたであろう。後年作家兼言語学者となるハンス・ユルゲン・フォン・デア・ヴェンゼ（Hans Jürgen von der Wense）がまだ学生だった1919年に，やはり後年画家として名を成す友人のヴァルター・シュピース（Walter Spies）をヘレラウに訪れた時の様子を，次のように日記に記している。「そこには祝祭劇場がある。周りには邸宅が建ち，そこに住むのは芸術家ばかりだ。群れを成して住んでいる。(...) 始終誰かが誰かを指さして言う。〝あそこに行くのは某氏だ，彼は新しい小説を書いている。あの女性は某嬢だ。君，知らないの？　誰それの娘さんだ，ほらあの記念碑の...。〟さながら動物園である。」[32] オールタナティヴ派のモンテ・ヴェリタに比べてヘレラウの芸術家コロニーは多少市民的であったと想像されるが，宗教的寛容さには重きが置かれ，ヘレラウには教会が建設されることがなかったと言われている。

そのような寛容さは30年代になってナチズムの時代になると全く失われてしまうが，ヘレラウにとっての最初の試練はまず第一次世界大戦と共に訪れる。ダルクローズが一時帰国していたスイスからドイツに再入国できなくなり，ダルクローズ学校は閉鎖され赤十字の検疫所として接収されてしまう。ヘレラウ建設の続行は経済的に困難になり，当然計画の縮小を余儀なくされる。ヘレラウの健全な発展を阻んだ多くの困難に関しては次稿で紹介するつもりである。

（その他の参考文献）

1．Arnold, Klaus-Peter, Vom Sofakissen zum Städtebau, Dresden・Basel,

---

[31] ibid., S.103.

[32] Hans Rhodius (Hrsg.) Schönheit und Reichtum des Lebens Walter Spies, Den Haag, 1964. S.87.

1993.

2. Baumgartner, Judith, Ernährungsreform - Antwort auf Industrialisierung und Ernährungswandel. Frankfurt a.M., 1992.

3. Bergmann, Klaus, Agrarpolitik und Großstadtfeindlichkeit, Meisenheim, 1970.

4. Bollerey, Franziska, Archtekturkonzeptionen der utopischen Sozialisten, Berlin, 1991.

5. Durth, Werner (Hrsg.), Entwurf zur Moderne, Stuttgart, 1996.

6. Fritsch, Theodor, Die Stadt der Zukunft, Leipzig, 1896.

7. Hartmann, Kristiana (Hrsg.), Im Grünen wohnen - im Blauen planen, Hamburg, 1990.

8. Kampffmeyer, Hans, Die deutsche Gartenstadtbewegung, Berlin, 1911.

9. Krückemeyer, Thomas, Gartenstadt als Reformmodell, Siegen, 1997.

10. Linse, Ulrich (Hrsg.), Zurück o Mensch zur Mutter Erde, München, 1983.

11. Linse, Ulrich, Organisierter Anarchismus im Deutschen Kaiserreich von 1871, Berlin, 1969.

12. Lorenz, Karl, Wege nach Hellerau, Dresden, 1994.

13. Mendelssohn, Peter de, Hellerau Mein Unverlierbares Europa, Dresden, 1993.

14. Muthesius, Stefan, Das englische Vorbild, München, 1974.

15. マルタン，フランク（他）『エミール・ジャック＝ダルクローズ』，全音楽譜出版社，1977.

16. バンドゥレスパー，エリザベス『ダルクローズのリトミック』，ドレミ楽譜出版社，1996.

17. 長谷川章『世紀末の都市と身体』，ブリュッケ，2000.

Eine Utopie der Moderne: Das Phänomen Gartenstadt in Deutschland(4)
—— Die Entstehung der Gartenstadt Hellerau ——

Miyuki SOEJIMA

Die Gartenstadtbewegung um die vorige Jahrhundertwende war ein Versuch, die in Folge von Industrialisierung verursachten Wohnungsnöte und Missstände in den Großstädten zu verringern. Das Ziel war ein Städtebau auf gemeinnützigem Boden, der arbeitsplätzeschaffende Industrie, Einfamilienhäuser mit Garten und Grüngürtel um die Stadt zur landwirtschaftlichen Nutzung bietet. Der erste praktische Versuch dieser Konzeption in Deutschland war die Gründung der Gartenstadt Hellerau bei Dresden. Der Gründer und Finanzier war Karl Camillo Schmidt, der die Ausbaunotwendigkeit seiner Möbelfabrik »Deutsche Werkstätten für Handwerkskunst« als eine gute Gelegenheit für den Bau einer Gartenstadt ansah. Schmidt erwarb 6,5 km nördlich von Dresden 140 ha Land und gründete die "Gartenstadtgesellschaft Hellerau GmbH". Sein Konzept beinhaltete den Bau von drei Bereichen: einer Fabrikanlage als Zentrum der Arbeit und als soziale Absicherung des Ganzen, Wohnhäuser der Arbeiter, deren derzeitige Lage dringend verbesserungswürdig war sowie Wohnhäuser der Gartenstadtfreunde, die die Vielgestaltigkeit eines kulturell-sozialen selbständigen Gemeinwesens ermöglichen. Im Jahr 1909 begannen die ersten Arbeiten für den Stadtbau. Bald entstanden der neue Fabrikhof der »Deutschen Werkstätten Hellerau«, ein Kleinhausviertel, ein Villenviertel, ein Marktplatz, Geschäfte und Schulen. Bei Gründung der Baugenossenschaft wurde die demokratische Mitbestimmung der Bewohner beschlossen, so dass das vom Arbeits-

auftrag der Fabrik unabhängige Bewohnen der Häuser und die Selbstverwaltung des gemeinnützigen Bodens durch die Bewohner ermöglicht wurden.

Die Gartenstadt Hellerau war mehr als eine Arbeiterkolonie, nämlich eine Verbindung von Großstadt und Land. Im Unterschied zum englischen Vorbild gab es bei der deutschen Gartenstadtidee eine lebensreformerische und sozialpädagogische Konzeption, die die wohnungsreformerische Zielsetzung ergänzte. Hellerau benötigte ein Bildungswesen, in dem die Kunsterziehung zum Ausbilden der neuen Menschen in der neuen Gesellschaft beiträgt. Als solches Kunsterziehungsprogramm schien Rhythmische Gymnastik ideal, die die Kräfte des Menschen zu einer neuen Synthese verbindet. Dafür wurde der Genfer Rhythmiker Emile Jaques-Dalcroze nach Hellerau gerufen. 1911 wurde die »Bildungsanstalt Emile Jaques-Dalcroze« mit einem Festspielhaus gebaut, dessen monumentale Architektur heute noch als Wahrzeichen Helleraus angesehen wird.

Die kleine Gartenstadt-Idylle zog viele Künstler wie Maler, Bildhauer und Goldschmiede an-bald entstand eine Künstlerkolonie. Insbesondere spielte der Verleger Jakob Hegner eine wichtige Rolle, indem er den »Hellerau Verlag« gründete und Schriftsteller wie Theodor Däubler, Franz Blei, Paul Adler und andere um sich sammelte. Die jungen ambitionierten Verleger und Schriftsteller publizierten Bücher und Zeitschriften mit dem Ziel, vorzügliche literarische Werke einem breiten Publikum zugänglich zu machen und ihm ästhetische humanistische Anregungen zu geben. Tatsächlich angeregt vom Hegnerschen Vorbild wurden mehrere angehende Verleger in Hellerau ansässig und gründeten ihre eigenen kleineren Verlage.

Es war die Zeit der Lebensphilosophie, der Lebensreform und der

regen Kunstbewegungen. Um so bedauernswerter ist es, dass der Ausbruch des ersten Weltkrieges der Weiterentwicklung Helleraus abrupt Hindernisse in den Weg legte und somit dieser utopische Versuch um besseres und humaneres Leben in der modernen Zeit beeinträchtigt wurde.